過程の中の技術：アメリカにおける物質文化研究史から

Technology in Process: From the History of American Material Culture Studies

後藤　明
GOTO Akira

I. 物質文化研究の定義と意義

筆者は近年、フランス技術人類学の伝統、とくにA.ルロワ＝グーランに由来するシェーン・オペラトワール論がハビトゥス論やエージェンシー論を介して英米の先史考古学や民族考古学に影響を与え始めていることを論じた（後藤 2011, 2012）。その中では紙面の制約と自らの準備不足から、もうひとつの大きな陣営であるアメリカ物質文化や歴史考古学の展開を関係づけることができなかった。

しかるに近年オックスフォード大学から『物質文化研究ハンドブック』（Hicks and Beaudry eds. 2010）が出版された。その編者である英国のヒックス（Hicks）とアメリカのボードリー（Beaudry）は民族学や民俗学者ではなく、各々の国を対象としてきた歴史考古学者である。２人は数年前『歴史考古学への招待』（Hicks and Beaudry eds. 2006）という入門書を編集しているが、このたびはなぜ彼ら米英の歴史考古学者が物質文化研究という多領域にまたがる分野のハンドブックを編集したのだろうか。

アメリカにおける物質文化研究は、アメリカの大学特有の「アメリカ研究（American Studies）学科」において盛んに研究され（e.g. Schlereth 1982）、建築史、装飾芸術あるいは人類学の分野であるフォークロア、考古学、民族学とも密接な関係の中で、独自の学際的な分野として発達してきた（Yentsh and Beaudry 2001； Hicks and Beaudry 2006）。それに歩調を合わせてこなかったイギリスの歴史考古学が（e.g. Tarlow and West 1999）、なぜ物質文化研究という脈絡でアメリカの歴史考古学と接近したのか（e.g. Cochran and Beaudry 2006）、という問題意識が本稿を書いた理由である。

そのような問いに直接答えるためにはいくつかの基礎作業が必要である。本稿はそのひとつの基礎作業、とくにアメリカ物質文化研究の動向に関する一考察である。とくに本稿は、別稿（後藤 2012）を補足する意味で、アメリカの物質文化研究における近年の技術人類学の先駆的な研究をいくつか紹介しながらその意義を検討することを目的とする。

II. 研究史

T. シュレレス（Schlereth）によるリビュー論文によると、物質文化とは触れることができるモノを生産し、また使用するための計画、方法あるいは理由を人々に提供する人間の習得や行動の諸断面を包括する概念である（Schlereth 1982： ２）。

アメリカにおける物質文化研究はアメリカンスタディーズという制度の中で盛んに行われてきた。そこではヨーロッパ、とくにイギリスの伝統からどのようにアメリカ

的な文化が発達してくるかが関心の中心であった。この背景には彼の命名するアメリカ化運動（American Movement）と物質文化研究が密接に結びついていたことがあげられる。

アメリカ化運動とは、独立戦争を勝ち取ったアメリカにおいてヨーロッパとは異なったアメリカ的な文化意識が生まれてきたことに呼応する運動である。これには二つの意味がある。ひとつはイギリスやドイツといった「祖国」の伝統に由来する文化要素がアメリカにおいて独特の発達を遂げようとしていた状況、さらに数多くの移民からなる多様な新興国に「アメリカ的」といえるような共通の文化が生まれつつあった、という意味である（Schlereth 1982：５）。

シュレレスはこの論文が書かれた1980年代初頭までのアメリカにおける物質文化研究を三つの時期に分けて考えている：（１）骨董品やフォークアートの収集が始まった時代（The Age of Collection： 1876-1948）、（２）資料の記述や分類が始まった時代（The Age of Description： 1948-1965）、そして（３）解釈の時代（The Age of Interpretation： 1965）から現代[=1980年代]、である。

さてこの論文か書かれている「解釈の時代」である70年代には、墓石学会などさまざまな組織が作られて学問的な活動が活発化した。一方で伝統的物質文化や歴史的文化財の消滅の危機が認識された（Schlereth 1982： 34）。さらにアメリカの社会史学者はイギリスの社会史、フランスのアナール学派などの影響をうけ、人文科学から社会科学へとスタンスを変更し、社会構造、地位、エスニシティやジェンダーなどに由来する社会矛盾に興味を持ち、その脈絡で物質文化への関心が高まった時期でもある。

以下この時代の潮流を特徴づける種々の範型ないしアプローチが定義される。合計９つの範型が３枚の表を作って３つずつ示される（表のタイトルは「アメリカ物質文化研究における現代の研究傾向」）。これら９つはすべて横並びに存在したというものではない。ひとつの研究が異なった範型に入りうる、つまりひとつの研究が複数の傾向を併せ持っていることもありうることが指摘されている。その上でアメリカ物質文化研究をある次元できると最初３つの傾向、また別の次元ではさらに３つという具合にこの表は読むべきであろう。

さて最初の表に示された３つの範型、A.1. 美術史（art history）、A.2. 象徴主義者（symbolist）、A.3. 文化史的傾向（culture history orientation）の特徴は次のように論じられる（Schlereth 1982: Table 1.2_Part I）。

A.1. 美術史

特定のアーティストによって創造されたと同定できる対象としての人工物に関心を向ける、すなわちアーティスト伝統としての職人の伝統（craftsman-as-artiste tradition）の追究である。職人の作品が主なる関心対象となる傾向があるが、モノないし作品へのフェティシズム的傾向が問題である。また芸術作品の影響や庶民化といった一種の高文化から庶民文化へ、ヨーロッパからアメリカへなどトップ・ダウン的傾向があった（Schlereth 1980：40-41）。それに対してトレント（Trent）は批判を行い、作品を傑作として非連続的に見る視点ではなく、フォークアートも連続体として見るべきとする（Trent 1977）。しかしスタイルそのものの分析も価値がありうる、たとえばある時代に見られる異

なった物質文化間に共通に見られる様式は当時の人々の価値観などを示すとの意見もある（Schlereth 1982： 43）。

A.2. 象徴主義者

職人気質（craftsmanship）といわれる心的・手動的過程の結果としての人工物に関心をもつ視点である。職人とアーティザン的伝統（craftsman-and-his-artisanary tradition）への視点から、関心の対象は職人の仕事やその成果物となる。この視点は物質文化を人々の世界観の反映だとする神話とシンボル（myth-and-symbol）学派の影響がある。たとえばブルックリン橋がアメリカ社会、とくに独立と繁栄の象徴性を持つというような視点の研究が事例である。しかし象徴性はそれを作ったり使ったりする人が意識する場合もあるが、意識されない場合もある。また後に残存して別の意味を帯びたりもするのである。また解釈の恣意性、データをすでにあるテーマに適合させてしまう危険性も指摘されている（Schlereth 1982： 45）。

A.3. 文化史的傾向

個人のもっている経済的・社会的地位の意義ある表現としての人工物、歴史的なアクターとしての職人伝統（craftsman-as-historical-actor tradition）への関心に特徴づけられる。労働者としての職人そのものが主なる関心対象となる。かつてアメリカの歴史考古学は考古学資料をユニークな出来事の証拠と考え過去の復元が目的となっていた（＝静的な復元主義者 static reconstructionists）。一方、考古学資料を繰り返される過去のプロセスとみる立場（＝プロセス的復元主義者 process reconstructinists）が台頭する。この背景には当時隆盛を誇っていたアメリカのプロセス考古学の影響も大きく、しだいに歴史考古学者も社会的な関心、たとえば性の分業、人口学的あるいは栄養学的な問題、親族組織の象徴性などに関心が向いていった。このアプローチの代表作である『忘れられた小さなモノの中に』でJ. ディーツ（Deetz）は物質文化と文献を駆使してアメリカ革命が庶民の文化にはあまり大きな影響を与えなかったことを証明した（1977）。ディーツは秩序だったシステムである文化が変化する状況へと対応し、つねに再適応し、さらにその統合システムも変化するといった動態を明らかにした。これと対応して意識されたのは 研究や博物館展示で過去を復元することの本質的な問題点、すなわち常に変わる生活を静的なものとして提示してしまう問題である（Schlereth 1982： 49）。

次の切り口はB.1. 環境主義者的先入観（The Environmentalist Preoccupation）、B.2. 機能論的論理（The Functionalist Rationale）、B.3. 構造主義的観点（The Structuralist View）、である（Schlereth 1982： Table 1.2 _Part II）。

B.1. 環境主義者的先入観

地理的条件と文化要素の分布との間の関係に着目する研究である。地形や景観に刻まれたさまざまな人間行動の証拠から人々の歴史や適応、あるいは世界観を読み取ろうとする立場である。もともとはサウアー（Sauer）やクローバー（Kroeber）のような地理学ないし人類学の伝播論および分布論を背景にもつ（Schlereth 1982： 50）。暗黙の仮定として、伝播の過程でさまざまな要素を失いあるいは新たに統合する文化の超有機体説（クローバーの思想）がある。かつて学位論文の出版『東部アメリカにお

ける民俗物質文化のパタン』(Glassie 1968) でアメリカ東部の民具の分布を論じたH.グラッシーは分布現象に集中するあまり個々人や職人の創造性に対する配慮が足りなかったと反省している (Glassie 1975： 8-12)。

B.2. 機能主義的論理

機能主義者は、いかに作り手がモノを作るために行動したか、それと同時にいかにモノそのものが機能しているか、すなわちいかに実際にモノが社会文化的脈絡の中で機能しているかを説明しようとする (Schlereth 1982： 54)。機能主義者は製作者の意図を合理的に説明しようとするが、同時にその「合理的意図」を説明するに当たって構造主義的な思考も必要となる。

B.3. 構造主義的観点

構造言語学の影響を受け物質文化の構造に二元論などの規則性を見いだし、そこに文化的コードを読み取ろうとする姿勢を言う。アメリカ物質文化研究者の間でその理論的支柱であるレヴィ＝ストロースが早くから参照されたのは、その著作が60年代から英訳されてきたことも影響するであろう。ただし構造変化を生物進化のように複雑化と捉える生物学的構造主義 (biological structuralist) と、言語モデルように規則とその応用を目指す言語学的構造主義者 (linguistic structuralist) の二者がある。グラッシーの建築に関する記念碑的著作は後者の事例であり (Glassie 1975)、彼はレヴィ＝ストロースや構造言語学的なモデルを大々的に引用している (Schlereth 1982： 57)。ただし構造言語学といってもアメリカにはフランス流とは異なった構造言語学の潮流があり、多くのアメリカの学者 (例 ディーツ) はその影響を受けていることに注意すべきだろう。

最後の切り口はC.1. 行動論的概念 (The Behavioralistic Concept)、C.2. 国家的な特徴への焦点 (The National Character Focus)、およびC.3. 社会史的な範型 (The Social History Paradigm) である (Schlereth 1982： Table 1.2_Part III)。

C.1. 行動論的概念

O.ジョーンズの著作 (Jones 1975) などに代表される立場で、説明要因を「文化的規範」にせずに職人など個々人のもっている創造性、そして彼らのさまざまな局面における意志決定などに注目する。ジョーンズの著作については詳しくは後述する。対象はそれをつくった人の理解無しには十分には理解できない、対象物は何かのための道具であると同時にそれ自体が目的でもある、対象物は美的な効果と同時に実践的な意味を持つ、などの主張が根底にある。対象とするのは狭義の製作活動だけではなく、そこに含まれる認知、使用、適応、装飾、消費、廃棄などの諸行動の連鎖を見ようとする立場である。

C.2. 国家的な特徴への焦点

このアプローチは個人の実践行動に着目したジョーンズなどの方法と異なって集合的なWeltanschaung (世界観) を重視する。このアプローチは文化史および機能主義的なアプローチと共通性を持つ。その特徴は社会全体に共通するメンタリティと行動パタンを想定する点である。つまり個々の文化特有の考え方 (文化史的視点) と同時にそれらによって人々が統合されているという機能主義的な視点を含んでいる。その代表者のD.ブースティン (Boorstin) はアメリカ人の世界観を物質文化や技術史から

1. 経済的経験（economical experience）、2. 国家的経験（national experience） そして 3. 民主主義的な経験（democratic experience） と整理した（Schlereth 1982： 67）。この立場に対する批判としてはアメリカ人がみな同じような世界観をもっているのか、物質文化がそれ以外の情報よりもより適切な研究対象であるとなぜいえるのか、などがあげられる（Schlereth 1982： 67）。

C.3. 社会史的な範型

日常的行動へと対象を広げたフランス・アナール学派や非エリート的資料への視野に入れたイギリスの労働史研究に影響を受けた立場である。この立場からされた現代物質文化研究はニュー社会史と多くの共通点をもち、しだいに民衆（＝常民）を見るようになった。代表者 J. デモ（Demo）は植民初期のプリマスでは子供は大人のような洋服を着ていたのは、子供時代という認識がなかったからだと論じた（Schlereth 1982： 69-70）。この研究に影響をうけて庶民の誕生や死などのライフサイクルへの興味から墓石の研究などがなされた。さらに食生活への興味はラスジェ（Rathje）らアリゾナ大学の廃棄論やゴミプロジェクト（garbage project）へとつながる。さらに家族をこえた社会的枠組み、たとえば労働ストライキや労働運動などへと分析対象が広がって行った。さらに同時にエスニシティや人種問題も対象となっていく（Schlereth 1982： 71-72）。

III. 1970 年代群像

1. ウィンタートウル・シンポジウム

アメリカ建国の地、デルウェアー州にあるウィンタートウル（Winterthur）博物館はアメリカにおける物質文化およびフォークアート研究の中心地であった。ここにおいてアメリカ建国 200 年の年に記念碑的なシンポジウムが開催された。1975 年のシンポジウムはクインビー編の論集『物質文化研究とアメリカ的生活』（Quimby 1978）、続く 1977 年シンポジウムは論集『アメリカ的フォークアートに関する諸視点』（Quimby and Swank 1980）に結実している。そしてこの 70 年代半ばはアメリカ民俗学あるいは物質文化研究でも時代を画す、H. グラッシー（Glassie）、K. エームス（Ames）、M. ジョーンズ（Jones）らの著作が次々と現れた時でもある [(1)]。そして 1990 年代には第２期ウィンタートウル・シンポジウムが行われ、あらためてアメリカにおける物質文化のリビューが行われている（Martin and Garrison 1997）。

2. 物質文化は歴史学の補助手段ではない：グラッシーの挑戦

シンポジウムジウムと同じ年、H. グラッシーの建築に関するモノグラフの出版があった（Glassie 1975）。アメリカ民俗学、とくに物質文化の大御所グラッシーは 60 年代に学位論文を『アメリカ東部における民俗物質文化のパタン』（Glassie 1968）として出版した。この中で物質文化は個人がふれることの出来るものを作るための計画、方法、理由を提供する人間の学習の諸分節を包括するものであるとした（Glassie 1968： 2）。そのあと彼は folk objects と popular（mass, normative） および academic（elite, progressive）文化の対比を行っている（Glassie 1968： 5）[(2)]。そして民俗文化と大衆文化は排他的に存在するのではなく、大衆文化の影響を受けても作り方あるいは使い方は民俗文化的ということがありえるとした（Glassie 1968：

11)。

グラッシーはこの著作の中でアメリカ東部における物質文化、農具、楽器、建築、舟、馬具などの分布を分析している。その特徴はヨーロッパの様々な国や地域から来た人々が、多様な環境へ、必ずしも完全には適応できない諸道具を適応させようとして様々な変化をもたらした。またアメリカでは比較的都市化の影響が早く浸透したなどの特徴を指摘している（Glassie 1968：240)。たとえばカヌーに関する論考では先住民の樹皮舟や丸木船と西欧の伝統、さらにはアフロアメリカンが持ち込んだアフリカの伝統がどのように影響しあい、新しい統合としてアメリカ的な舟ができていくかを論じている。また森林の伐採や商品経済の浸透によって物質文化としてのカヌーがどのように役割を転じて行くか論じている(Glassie 1973)。

続く著作（Glassie 1975）で彼が主張したのは、物質文化はおおむね無識字層であった庶民の歴史を描く手段であることである。また彼の文献史学への批判はフランス・アナール学派を採用した「ニュー社会史」集団と呼応するものであった（Glassie 1968)。彼は物質文化はそれを生み出す規則があり、また同時にコミュニケーションの一形態であるとの認識を導いた。物質文化は単に読まれるべきテキストではなく、独自の語彙と文法を備えたテキストであると。彼の著作は物質文化研究者に自信を与えた。

グラッシーは言う「文化とは心の中のパタンで、文章あるいは家のようなモノを作るための能力である」(Glassie 1975：17)。また「モノは作られるがモノに関する概念は外部的なモノに関する内的な観念と関係している」(Glassie 1975： 17)。「論理的に能力(competence)は先行している。というのは脈絡から独立した行為としての能力を想像することはできるからである。一方脈絡に身を置く個人の問題に対するあらゆるアプローチはモノを創出する彼の能力（ability）の理解に依存するからである」(Glassie 1975： 17)。

彼はバージニア中部における歴史建築の分析を通して基本的な部屋の大きさは連続的に増大ないし減少するのではなく、ヤード yard(約 90 センチ)を基本にキュービット cubit（中指から肘までの長さを原理とする 50cm 程度の単位）さらにスパン span（親指と小指の間の長さで約 23cm）という単位を加算ないし減算して決められたらしいことを見いだした。つまりヤードの半分はキュービット、その半分はスパンという具合である。さらに部屋を足していったり、ひとつの部屋を分割していくルール、さらに部屋の間に穴（pearcing）＝通路を作って繋ぐときの原理などを抽出して、多様な建築構造を数少ないルールの組み合わせで説明しようとした。この考え方は構造言語学というよりもチョムスキーの生成文法的をモデルとしている[(3)]。

3. フォークアートに関する５つの神話

K. エームス（Ames）はウィンタートウル博物館の特別展に対する解説書『必要性を越えて:民俗伝統におけるアート』(1977)の中でフォークアート（民俗芸術)、あるいはそれを作る職人集団に関する５つの神話（偏見）を指摘する。フォークアートというある種ノスタルジックな響きを持つ概念には５つの神話があるという（Ames 1977： 21)。

(1) 個人性という神話（the myth of individuality)

フォークアートの担い手である職人は

通常個人としてアートを作り、またそれを売り、いわば個人経営主である。したがってその作品は職人ごとにユニークであるはずだ、という考え方である。博物館の展示にしても「代表作」の断片的な展示によってそのような印象が作られる。その時代の類似した傾向を持つ職人の作品、あるいはそれに先行する時代の作品を並べれば、どの時代の職人も様々な地域的時代的脈絡の中でアートを生産しているにもかかわらずである（Ames 1977： 22）。

この神話は人間の心の創意に富んだ（inventive）性格を強調するあまり、実際にアートを作るときになされる意志決定についての配慮を欠いている。ここで挙げられている椅子の事例でいえば、ひとつの椅子工房でなされた意志決定がいかに他の工房の決定に影響を与えるかということである。すなわち個人性の神話は人間の自由意志と個人的に無限な選択肢という現実にはあり得ない神話を形成している（Ames 1977： 22-23）。

主にヨーロッパからの移民で成立したアメリカ社会では、いかにアメリカで発案されたと思われるアートも多くの場合、その職人の出身である母集団に原型があることは、ドイツ系移民の職人が考案したとされる鷲の意匠によって示されている（Ames 1977： 224-25）。

⑵ 貧しいが幸せな職人の神話（the myth of the poor but happy artisan）

多くの研究者が言うようにフォークであるためには上層階級と区別される集団のアートである必要がある。したがってそれを作る職人は経済的には貧しい傾向があったのは確かであろう。たとえば飲んだくれで定住せず、身を滅ぼしたシーメル（Schimmel）のような職人のライフヒストリーは実はよく知られていないが「貧しいが幸せ」と決めつける根拠はない。

職人が一様に単調な仕事を繰り返すが幸せであった、あるいはそれを不幸と考えなかった、といった具合の先入観が研究者にはあったのである。これは仕事ではなく余暇や趣味としてフォークアート作りをする現代人の感覚を過去に投影した偏見のように思われる。1920 年代までが「貧しいが幸せな」時代、それ以降は退廃的であるというジャズ音楽に対する偏見と同じようにである。

⑶ 手作りの神話（the myth of handicraft）

フォークアートは手作りであり、機械作りの作品はそうでないという思考方式である。機械化や産業化が人間を疎外したという議論とは別に、轆轤や電動のこぎりを含め多くのフォークアートが機械化とまったく無縁であったはずはない。逆にエリートアートがまったくの手作りである場合も少なくない。

⑷ 葛藤のない過去という神話（the myth of a conflict-free past）

フォークアートは過去、とくに平和な葛藤のない過去を自然主義的に表現したというイメージがあるが、これは間違いである。フォークアートは職人が感じた時代状況をさまざな技法で表現したモノである。それは富裕な学術的芸術家（academic artists）とくらべ現実を表現する程度はそれ以上でもそれ以下でもない。アフリカからの奴隷や家庭内での女性の地位など、過去二十年ほどは見えにくかった集団やジェンダーの追究が大きなテーマとなっている。

⑸ **国家的独創という神話（the myth of national uniqueness）**

アメリカが二百年間培ってきたアメリカ的生活の優位性を表現するのがフォークアートであるという観念である。自由で民主的で個人表現に富むというアメリカ文化の神髄をフォークアートに見るという態度であり、その意味でヨーロッパのフォークアートより先んじていたという自信にもつながる。グラッシーの研究が初期のアメリカの物質文化はヨーロッパの伝統から変容であると跡づけたように（1968）、移民たちがアメリカという新しい土地に来て突然過去と決別して新しいモノを作り始めたわけではない[(4)]。

このあとエームスはフォークアートにおける伝統（tradition）、装飾（decoration）、能力（competence）について論じている。そしてフォークアートは人間の心の作用（the operation of mind）に関する重要な切り口であり、そのすぐれた事例として本稿で紹介するジョーンズ（Jones）、グラッシー（Glassie）、さらにトレント（Trent 1977）らを挙げている（Ames 1977：99）。

4. たった一人の職人から：ジョーンズの著作

シュレレスのリビューで行動主義の代表とされ、またマーチン・ギャリソン論考（Martina and Garrison 1997： 7）でもかなり詳しく論じられている、マイケル・オーウェン・ジョーンズの著作『手作りのものとその作り手』（Jones 1975）に着目したい。

まずこの本を開くと驚きがある。全文が手書きで書かれているように見えるからである。実際はD. コムストック（Comstock）という人物によってデザインされた筆記体式の活字が使われていることが奥付に記されている。手作りの技を論じるために凝った手法の本作りが行われたようである。

さてジョーンズは、個々人はその信念や価値観、技法や動機においてユニークであるとの前提のもと、モノの製作者個人に焦点をあてた。彼が対象としたのはケンタッキーに住むチャーリーというたった一人の椅子職人であった。本書では随所にチャーリーとの会話がスラングそのままで記されている。たとえば"I have Bin this month Workin day and nite on a Big Roker.［＝俺は今月、昼も夜も大きな揺り椅子作りに携わってきた］"（Jones 1975： 1）のようにである。

ジョーンズは言う「作り手はみなその行動がたくさんの要因に動機づけられた複雑な個人である。どんなモノの製作、使用、そして評価も分析し把握するのが難しい複雑な研究対象である」（Jones 1975： vi）。さらに「人間行動の研究は個人で始まり、個人で終わるべきである。というのは、モノはそれを作った者の知識無しには完全に理解され評価されないのである。そして一つのモノの特徴はいかに後の特性がそれから発達したといわれようとも以前の作品への言及のみでは説明されないのである。モノは何かを成し遂げるための実践的な結果であると同時に、目的そのものでもある。研究者は芸術的な創造過程を技術的なそれから切り離すことはできないのである」（Jones 1975： vii）[(5)]。

またジョーンズはモノ作りにはそれを見たり、買ったりする対象との対話でもあるとする。生産物は静的なものではない：「椅子のようなモノもやがて色が変化し、格好もゆがみ、あるいはギシギシ音を立てるようになるかもしれない。そのように五感に

感ずる特徴を通してその作品を見たり所有したりする相手に反応を引き起こす」(Jones 1975： 13)。彼によると音楽や物語はそれを聞く人々に評価されるべき技巧が必要であり（Jones 1975： 17)、そのことによって鑑賞ないし歓喜的な反応を引き起こすが、モノ作りもこれと同じである。アートとは、彼が作ったモノの中に現れた職人個人の道具や素材のマスター具合を評価する刺激として機能するモノを作ることにおける技法である。作られたモノはその技法の結果であり、その技法の使用を表現する活動である（Jones 1975： 15)。

ジョーンズはいわゆる民俗（lore）あるいは伝統的な知識や技法は、研究者が仮定するように一様に上の世代から下の世代に伝達継承されるわけではないとする。たとえば他人から習わない職人もいるがチャーリーのように他の人の技法をよく参照し新しい形態を生み出すために絶えず実験しているような職人もいる（Jones 1975： 21)。同じように「プリミティブアート」を作るプエブロインディアンの土器製作者やイヌイットの彫刻家は長い間白人との接触を体験し、その脈絡でさまざまな刺激を受けながら技法を継承している（Jones 1975： 25)。

さらに結論部でジョーンズは言う「アートといわれるものの大部分は道具であると同時に目的そのものである…たいていのアートは複合的な目的を持っている。しかしこの事実はときにはプリミティブアートや高尚アートの研究において無視されてきたのだが」(Jones 1975： 203)。そして作品を様式の一部としたり、その源泉を過去の様式に帰するのは限界ある見方である。それは動的なものを静的に、刹那的・一次的なものを恒久的なモノに、個人的・個性的なものを一般的なモノに、きわめて複雑でときには矛盾があり、さらにカオス的なものを人工的で単純な具合に体系化し秩序立ててしまうからである（Jones 1975： 213)。

ジョーンズは、自分が関心あるのは、他の人と相互交流しながらモノを作り何かをする人、そしてそれらを買って使う人々である。私が関心を向けたいのは彼らが作ったモノに関係し、それによって表現されている個人の経験、ときには矛盾したり刹那的に見える観念である。私が焦点をあててきたのはそれを作るために必要とされる技法ゆえに評価される日常的なモノであるという（Jones 1975： 217)。

椅子作りは手によってモノを作る結果に終わる産業であるので、製作者個々人はモノを作る責任をもつエージェントである（かりに顧客の願望の影響力があっても)。そして彼の感情、価値観、経験、信念そして必要性はしばしば彼が作るモノ、そして彼がモノを作るやり方に表現されている。したがって椅子作りは匿名ではない、かりに研究者にとって作り手が知らされていなくてもである（Jones 1975： 223)。

IV. 考察：1970 年代物質文化の今日的な意義

エームスによるとジョーンズは「一人の個人によって作られる椅子の外見に影響する広範囲な要因を分析した」とされ、またグラッシーは「建築家が示す能力（competence）はきわめて複雑であることを示すために、一見作りが単純に見える、一連の関連する家屋群の構造的分析を試みた」(Ames 1977： 98-99)。

ジョーンズとグラッシーは対象の取り方が好対照である。ともに作り手の心の作用に迫るという共通の目標はもっているが、ジョーンズは一人の職人にこだわり、グ

ラッシーは多量の資料を対象としたからだ。さらにグラッシーが分析したのは過去に建造された建築であるから、それを作った人間に聞き取りをしたり建造過程を観察したりできない。すなわちグラッシーは建築構造の多様性の中に、それらを生み出す共通の原理を探ることで、それを作った職人の心の作用、すなわち状況に応じた規則の適応を追究しているのである。この点でむしろディーツなど歴史考古者の立場に近いといえよう。しかしグラッシーはこのあとアイルランド（1982a）、トルコ（1993）、バングラディッシュ（1997）、日本（1999a）などで実際に生きている職人の対話と観察を元にした調査に邁進する[(6)]。

ジョーンズは民族芸術あるいはフォークアートの非個人性、匿名性という偏見を糾弾する[(7)]。ジョーンズはここで人類学の業績を参照する。たとえばボアズは『プリミティブアート』（2011）においてアートそのものではなく、アーティストに注目すべきと言った。英国の A. ハッドンも『芸術における進化』（Haddon 1895）において原始芸術の形態が何を意味するのかを追究することに終わらずに、なぜそうなのか、その背景の動機などにも注目すべきといった（Jones 1975： 9）。またボアズが言うようにアーティストの心的プロセスは必ずしも意識されて行われるわけではない（Jones 1975： 8）。これは A. ルロワ＝グーランが無意識、潜在意識、意識を区別し、モノ作りにおける自動的、機械的、意識的な行為の連続性を指摘していることを想起させる。しばしばモノ作りは「心理の薄暗がり」の中で行われる、というのと同じ主張である（1973： 230）。

またジョーンズはモノ作りを歌の詠唱や物語を語る行為にたとえている：「（モノ作りは）人間の思考と行為の動的な過程…（たとえば）彫刻は歌のような行為なのである」と（Jones 1975： 12）。グラッシーもモノの使用は創造の一部であると言うなかでモノ作りと物語を対比している。たとえば使用者が作り手にどのように要求するかによって作り方も異なってくるので、「使用は人工物の製作過程に浸かっている。それは物語を語ることの中に聞き手の反応には幅が見込まれているから」と（Glassie 1991： 262）。これは近年 T. インゴルドがモノ作りと物語の類似性を指摘し、「道具使用はつねに思い出すことである」としていることにつながる（Ingold 2011： 57）。

ジョーンズは著作の中でチャーリーの認知的および行動的過程、個人的な創造性や美的な衝動を理解し説明しようとした。彼は文化を説明要因にせずに直接観察に基づいて職人の行動における連続性や一貫性を研究した（Schlereth 1982： 58）。対象はそれをつくった人の理解無しには十分には把握できない。対象物は何かのための道具であると同時に目的でもある、また対象物は美的な効果と同時に実践的な意味を持つ、といった考えの基にである。またジョーンズは著作の中で artist、craftsman、producer、creator そして chairmaker の区別をせず、また art と craft あるいは ”to create”、”to build” そして “to construct” という行為ないし概念を区別せずに使っている（Schlereth 1982： 60）。

ジョーンズのアプローチは構造主義者によって追究された人間の共通性よりも、人間の創造性の多様性を強調する傾向がある。行動主義も構造主義も作り手の心の中に入っていくことを目指している。構造主義者は大集団を研究する傾向があるのに対し、ジョーンズやその影響を受けたアドラー（Adlre 1985）やブロナー（Bronner 1986）などは少数の職人とその生産物に集

中する傾向がある（Schlereth 1982： 60）。

ジョーンズらのように少数の職人のモノ作りに即して調査研究すれば彼／彼女がさまざまな葛藤や矛盾の中でモノを作ることを見いだすのはむしろ当然のことであろう。動作連鎖論の展開者 M. ドブレスは技術的実践の経験論的な基盤と、社会的集団（collective）の中でエージェントとして絶えず展開している世界内に身体化された存在（embodied being-in-the-world）は、身体と心を通して経験され意味づけられるゆえに日常的な技術的実践に密接に関連させられているという（Dobres 2000： 149）。さらに彼女はモノ作りにおけるアーティフィス（artifice）という概念を唱える[(8)]。ソロモン諸島の貝貨事例のようにモノを造るには狭義の技術だけではなく材料や労働の調達、あるいは製品の交易や販売にいたる様々な局面で社会的関係の「手練手管」が必要である。モノを作ることはすなわちヒトの関係を作ることである（Dobres 2000； 後藤 2002, 2007； Goto 2010）。

日常的な技術的行為にはかなりの程度、葛藤、仲介が伴い、また関心、状況に応じた反省（situated reflexivity）、技、知識、才能などにおける相違点の間の交渉（negotiation）の総和なのである（Dobres 2000： 154）。それまで見落とされてきたのは自己利益追求的技術的エージェントの動態、そして技術的行為のアーティフィスなのである。

たとえばチャーリーはどの程度作り始めの段階で作品をイメージしているのだろうか（cf. 後藤 2002）。椅子はしばしば個人注文で生産されるので顧客と交わしたノートをみると寸法や構造について細かい指示がなされていることがある。しかし一方で、使っている材料の予期せぬ性格、手による作業が生み出す結果の揺れなどによって偶発的創造（spontaneous creation）の側面も排除できない（Jones 1975： 55）。椅子作りは作り手と買い手との間の交渉も含めたアーティフィスであることが了解される。さらに作り手は物質に対して働きかけそれを変化させるが、その変化した状態が認知の起点となって次の作業の決断がなされる、という具合に物質、行為、認知が絡み合いながら進行して行くものなのである（後藤 2012）。

鍛冶屋を状況に応じた認知論的および省察論的な分析を行ったケラー夫妻は（Keller and Keller 1996）、鍛冶屋は金属を加工することによる特定の身体化された経験を通して彼ら自身を知り、彼らの社会的な位置づけを知るのである。このような議論からケリー夫妻の議論はハイデッガーが「世界内存在 being-in-the-world」は技術的実践が自己覚醒への道であると説いたのに接近している（Dobres 2000： 110）。ジョーンズの著作にはこのような分析方法に対する先駆的な試みであったように思われる。

最後に本稿でやり残したことにふれておこう。ジョーンズやグラッシー初期の作品は S. ブロナー『モノを掴まえる』（1986）などその後の作品へどのように継承されていったかの考察が必要である。さらにモノ作りにおける心の作用を探るために T. ヴェブレンの職人本能論（instinct of workmanship）（ヴェブレン 1997）あるいは D. パイのデザイン論（パイ 1967）など著名な古典との対決も残された課題である。

注

（1）さらに 1975 年には日本のタンス職人の所に住み込んで家具作りのエスノメソドロジー的な観察を行ったリンク（Link）の学位論文も出て

いる（1975）。

（2）ディーツのFolk cultureとPopular culture、あるいはElite culture, Academic cultureとの違いも参照（Deetz 1977： 41）。

（3）グラッシーのこの建築の研究はアメリカ民俗学・物質文化研究の金字塔とされるが、その分析方法を他の研究者が理解し、適用された例はほとんどないようである（McDaniel 1978；Hicks and Horning 2006: 278）。すなわちレヴィ＝ストロースの神話分析と似てグラッシーの建築分析は他の追従を許さない一代横綱的名人芸であった。なお一方1980年代にイギリスのI. ホッダーらケンブリッジ大学系統の考古学者がアメリカのプロセス考古学に対し、構造主義や象徴論を基軸としたポストプロセス考古学を唱えた。彼らはL. ビンフォード（Binford）らに代表されるプロセス考古学者の「適応の手段としての文化」という概念やその方法論の特徴であるポジティビズムを厳しく批判する一方、自分たちの行おうとしている構造主義的考古学の先駆者としてアメリカのグラッシーの建築分析、あるいはディーツの歴史考古学を評価している（Hodder 1982）。

（4）たとえばアメリカ型斧がイギリス型斧から分離発達してくる過程の論文（Kulik 1997）などによく論じられている。

（5）ジョーンズは別途家の建て替えやリフォームの問題を論ずる論考でフォークという概念は名詞である必要はないと論じている。またもし行動が観察の中心であるなら、フォークとフォークロアの区別も必要ないであろうと論ずる（Jones 1980： 355）。これはある意味では「成ることは有ることよりも大事（Becoming is more important than being）」（Ames 1978：98）という芸術家の言葉に通ずる。

（6）グラッシーにおける転機だったのは80年代に、彼にとって外国であるアイルランドの調査を行ったことと（1982a）、サンタフェにある国際フォークアート博物館のモノグラフ（1989）を書いたことではないかと思われるが、80年代から90年代にかけてのグラッシーの軌跡については改めて論じたい（e.g. Glassie 1982b, 1985, 1991, 1999b, 2000）。

（7）ただしどれだけ創造性があり個性があると言っても、職人が生きている時代、その先人たちの影響をまったく受けないでモノを作るという真空状態というのもまったく非現実的であろう（e.g. Trent 1977）。

（8）その辞書的な意味は「技術、たくみ、工夫、考案、手管、術策、策略」（『研究社英和辞典』）、つまり「手練手管」のようなニュアンスである。

参照文献

Adler, Thomas

1985 Musical instruments, tools, and experience of control. In: S.J. Bronner（ed.）, *American Material Culture and Folklife*. Ann Arbor: UMI Press, pp.103-118.

Ames, Kenneth L.

1977 *Beyond Necessity: Art in the Folk Tradition*. A Winterthur Book. The Winterthur Museum.

ボアズ、フランツ

2011『プリミティブ・アート』、言叢社（原著Franz Boas, *Primitive Art*, 1955）。

Bronner, Simon J.（ed.）

1985 *American Material Culture and Folklife: A Prologue and Dialogue*. Ann Arbor: UMI Press.

Bronner, Simon J.

1986 *Grasping Things: Folk Material Culture and Mass Society in America*. Lexington: The University Press of Kentucky.

Cochran, Matthew D. and Mary C. Beaudry

2006 Material culture studies and historical archaeology. In: D. Hicks and M.C. Beaudry（eds.）, *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 191-204.

Deetz, James

1977 *In Small things Forgotten: the Archaeology of Early American Life*. New York: Anchor Press.［1996, Second Edition.］

Dobres, Maracia-Anne

2000 Technology and Social Agency. Oxford: Blackwell.

Glassie, Henry

1968 *Patterns in the Material Folk Culture of the Eastern United States*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

1973 The nature of the New World artifact: the instance of the dougout canoe. In: von W. Escher, T. Gantner and H. Trümpy（eds.）,

Festschrift für Robert Wildhaber. Basel: Verlag G. Krebs, pp. 153-170.

1975 *Folk Housing in Middle Verginia: a Structural Analysis of Historic Artifacts*. Knoxville: The University of Tennessee Press.

1982a *Passing the Time in Ballymenone: Culture and History of an Ulster Community*. Philadelphia: University of Pennysylvania Press.

1982b Folk art. In: T.J. Schlereth (ed.), *Material Culture Studies in America*. Nashville: The Association for State and Local History, pp.124-140.

1985 Artifact and culture, architecture and society. In: S.J. Bronner (ed.), *American Material Culture and Folklife: A Prologue and Dialogue*. Ann Arbor: UMI Press, pp. 47-62.

1989 *The Spirit of Folk Art: the Girard Collection at the Museum of International Folk Art*. New York: Harry N. Abrams.

1991 Studying material culture. In: G.L. Pocius (ed.), *Living in a Material World: Canadian and American Approaches to Material Culture*. Institute of Social and Economic Research 1991, Memorial University of Newfoundland, pp. 253-266.

1993 *Turkish Traditional Art Today*. Bloomington: Indiana University Press.

1997 *Art and Life in Bangladesh*. Bloomington: Indiana University Press.

1999a *The Potter's Art*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

1999b *Material Culture*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

2000 *Vernacular Architecture*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

後藤　明

2002「技術における選択と意志決定――ソロモン諸島における貝ビーズ工芸の事例から」『国立民族学博物館研究報告』27 (2)：315-359.

2007「東部インドネシア・マレ島における土器製作システム：＜海上・土器製作＝交易者＞システムに埋め込まれた土器製作」、『土器の民族考古学』、後藤　明編、pp.123-139、同成社。

2010 Technological choices among Maritime Potter-Traders: The Mare Islanders of Northern Maluku (Indonesia) and Other Comparative Cases. In *Coexistence and Cultural Transmission in East Asia* (*One World Archaeology*). S. Hashimoto *et al.* (eds.), pp.105-123. Left Coast Press.

2011「民具研究の視座としての chaîne opératoire 論から物質的関与論への展開」『国際常民研究機構年報』2：201-218.

2012「技術人類学の画期としての 1993 年―フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考―」『文化人類学』77 (1)：41-59.

Haddon.Alfred C.

1895 *Evolution in Art*. London：Walter Scott.

Herman, Bernard L.

1997 The briloleur revisited. In: A.S. Martin and J.R. Garriso (eds.), *American Material Culture:The Shape of the Field*. A Winterthur Book. Winterthur: The Henry Francis du Point Winterthur Museum, pp. 37-63.

Hicks, Dan and Mary C. Beaudry (eds.)

2006 *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press.

2010 *The Oxford Handbook of Material Culture*. Oxford: Oxford University Press.

Hicks, Dan and Mary C. Beaudry

2006 Introduction: the place of historical archaeology. In: D. Hicks and M.C. Beaudry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-9.

Hicks, Dan and Audrey Horning

2006 Historical archaeology and building. In: D. Hicks and M.C. Beuadry (eds.), *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 273-292.

Hodder, Ian

1982 Theoretical archaeology: a reactionary view. In: I. Hodder (ed.), *Structural and*

Symbolic Archaeology. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-16.

Ingold, Tim

2011 Walking the plank: meditation on a process of skill. In: T. Ingold, *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*. London: Routledge, pp.51-62.

Jones, Michael Owens.

1975 *The Hand Made Object and Its Maker*. Berkeley: University of California Press.

1980 L.A. Add-ons and Re-dos: Renovation in folk art and architectural design. In: M.G. Quimby and S.T. Swank (eds.), *Perspectives on American Folk Art*. New York: W.W. Norton, pp. 325-363.

Keller, Charles M. and Janet D. Keller

1996 *Cognition and Tool Use: the Blacksmith at Work*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kulik, Gary

1997 American difference revisited: the case of the American axe. In: A.S. Martin and J.R. Garriso (eds.), *American Material Culture: The Shape of the Field*. A Winterthur Book. Winterthur: The Henry Francis du Point Winterthur Museum, pp. 21-36.

ルロワ＝グーラン、アンドレ

1973『身ぶりと言葉』(荒木亨訳)、東京書籍。

Link, Carol Ann B.

1975 Japanese cabinetmaker: a dynamic system of decisions and interactions in a technical context. Ph.D. dissertation in Anthropology. University of Illinois.

McDaniel, G.

1978 Review of Henry Glassie 'Folk housing in middle Virginia a structural analysis of historic artifact'. *Journal of American Folklore* 91 (361): 851-853.

Martin, Ann Smart and J. Richie Garrison (eds.)

1997 *American Material Culture: The Shape of the Field. A Winterthur Book*. Winterthur: The Henry Francis du Point Winterthur Museum.

Martin, Ann Smart and J. Richie Garrison

1997 Shaping the field: the multidisciplinary perspectives of material culture. In: A.S. Martin and J.R. Garriso (eds.), *American Material Culture: The Shape of the Field*. A Winterthur Book. Winterthur: The Henry Francis du Point Winterthur Museum, pp. 1-20.

Montgomery, Charles F.

1982 The connoisseurship of artifacts. In: T.J. Schlereth (ed.), *Material Culture Studies in America*. Nashville: The American Association for State and Local History, pp. 143-152.

パイ、D.

1967『デザインとはどういうものか』(中村敏男訳)、美術選書(原著 David Pye, *The Nature of Design*, 1964)。

Quimby, M.G. (ed.)

1978 *Material Culture and the Study of American Life*. A Winterthur Book. New York: W.W. Norton.

Quimby, M.G. and Stott T. Swank (eds.)

1980 *Perspectives of American Folk Art*. A Winterthur Book. New York: W.W. Norton.

Schlereth, Thomas J. (ed.)

1982 *Material Culture Studies in America*. Nashville: The Association for State and Local History.

Schlereth, Thomas J.

1982 Material culture studies in America: 1876-1976. In: T. Schlereth (ed.), *Material Culture Studies in America*. Nashville: The Association for State and Local History, pp. 1-75.

Tarlow, Sarah and Susie West (eds.)

1999 *The Familier Past?: Archaeololgies of Later Historical Britain*. London: Routledge.

Tilley, Christopher, W. Keane, S.Kuchler, M.B. Lowlands and P. Spyer (eds.)

2006 *Handbook of Material Culture*. Los Angels: Sage.

Trent, Robert

1977 *Hearts and Crowns: Folk Chairs of the Connecticut Coast, 1720-1840*. New Heaven: Haven Colonizl Historical Society.

ヴェブレン、Y.

1997『ヴェブレン　経済的文明論：職人技本能

と産業技術の発展』(松尾博訳)、ミネルヴァ書房。(原著 T. Veblen *The Instinct of Workmanshop and the State of the Industrial Arts*, 1990)

Yentsh, Anne and Mary C. Beaudry

2001 American material culture in mind, thought, and deed. In: I. Hodder (ed.), *Archaeological Theory Today*. London: Polity Press, pp. 214-240.

West, Susie

1999 Introduction. In: S. Tarlow and S. West (eds.), 1999 The Familier Past?: *Archaeololgies of Later Historical Britain*. London: Routledge, pp. 1-15.